
ぶるぶる

STMile

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぶるぶる

【コード】
N3092J

【作者名】
ST Mile

【あらすじ】
志毛田教授が、N市のN上第三遺跡で発掘した、ある種非常識なものとは。
教授と、「もの」との奇妙な関わりを、ナンセンスに描きました。
楽しんでいただければ幸いです。

志毛田教授は、あろう事か出土品を放り投げてしまった。

教授は縄文時代の専門家で、今回N市のN上第三遺跡発掘の陣頭指揮をとっていた。この遺跡は教授の想像を超えた出土品が多く、正直なことをいえば教授も少々面食らっていた。

このままでは、教授の発表している日本海文化論に大きな修正を余儀なくされる。教授としては、これほどまでに様々な出土品が出るというのは、(発掘者としては楽しい限りであるが)研究者としては困ったことだと思っていた。その矢先、教授はまた一つ新たな出土品に恵まれたのである。

今回の出土品は、形としては勾玉に近いものであった。但し石に穴は開いておらず、また勾玉と言うには縦横の比率、曲率共に妙で、言うなれば空豆そのものの形をしていた。

大きさは長径で四センチほど、短径でも三センチちかくはありそうだった。色はやや透明感のある白で、表面は非常になめらかに加工されており、けして未完成のまま放り出されたようには思えなかった。

発掘位置の確認や現場写真などの煩雑な手続きがようやく終わり、志毛田教授は「空豆」をつまみ上げた。

手の中で、何か「ぷるぷる」と動いたように思えた。志毛田教授は反射的に「空豆」を放り投げてしまった。周りにいた者たちはびっくりしたが、教授はもつとびっくりした。

最初、カブトムシの幼虫でも掘り出してしまったかと教授は思ったが、教授の理性はすぐにそれを否定した。間違いなく石の質感であったし、大体見間違えるはずがない。

弟子の一人が「空豆」を拾い、志毛田教授に手渡してよこした。恐る恐る手のひらで受けると、それはまた「ぷるぷる」と動いた。今度は教授も放り投げこしなかったが、慌てて手近のトレイに「

「空豆」を納めた。

志毛田教授は自分の錯覚だと思ったかった。しかし大学に持ち帰りしかるべき計測をしてみると、確かに「空豆」は震えているのである。

この発見は学会のみならずマスコミにも一大センセーションを巻き起こした。「空豆」の組成はケイ素を主とする、どうひねくね考えても鉱物であり、動くはずがないのである。

その上、次の発見に志毛田教授は頭を抱え込んだ。なんと「空豆」が成長しているのである。何日かぶりに「空豆」を見て、教授は、はて、と思った。試しに計測してみると、初期より大きくなっていったのである。その後の計測で「空豆」は一週間に一ミリの割で成長していることが分かった。

各分野の専門家の研究と、あらゆる科学的調査にもかかわらず、「空豆」の謎は解けなかった。いっそ割ってみたらという乱暴な意見もあつたが、志毛田教授は必死に反論し（また、多くの学者が反対してくれたこともあり）「空豆」は無事守られた。

一時の熱狂が過ぎると、「空豆」の保管場所について静かな議論がなされた。結局、志毛田教授あずかりの出土品の一部として取り扱うことが妥当であるという結論となつた。教授としてはなんとも迷惑な気もしたが、同時に「空豆」への曰く言い難い愛着もあつたので、しぶしぶという体をとって、そのわりにはさっさと研究室に持ち帰った。

志毛田教授は、「空豆」について一つの発想を持っていた。「空豆」の振動は何かの信号ではないかというものである。その後教授は自分の研究そっちのけで、振動データにあらゆるパターン化を試み、ことごとく失敗した。振動データは完全なランダム発生を示唆していた。

ようするに適当に「ぶるぶる」してるのである。

退官まで、志毛田教授は「空豆」研究に打ち込んだが、結局得るものは何一つ無かつた。教授の退官の時点で、「空豆」の大きさは

五十六センチにも達し、すでに片手で持てるものでは無くなっていった。大きくなるにつれて、「空豆」はしっかり重くなっていたのである。

教授の退官に合わせ、「空豆」は教授の愛弟子、あの教授に「空豆」を手渡した弟子の預かりとなった。志毛田教授がなけなしの政治力を使い、自分のあとがまに据えたのである。

退官後、志毛田教授はしばしば弟子の下に訪れ、そのたびに「空豆」を抱えては撫でていった。そのころには「空豆」は「ぶるんぶるん」とかなり激しく揺れたが、志毛田教授は子供をあやすように抱えて、大層うれしそうだった。

志毛田教授が亡くなった。弟子は年々大きくなる「空豆」を見てはため息をついた。ある日弟子は、いつか「空豆」から志毛田教授が生まれてくるのではないか、とふと思った。何の根拠もない妄想だ、とすぐに否定したが、万一そのときは自分が立ち会いたいものだ、と、弟子は密かに思っている。

「空豆」の振動は、最近研究室を「ゆさゆさ」と揺さぶるようになっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3092j/>

ぷるぷる

2011年1月26日02時04分発行